

# 情報学の構築に関する一試論 (3)

——情報学における心理学の役割——

田 中 祐 次

## An Attempt to Construct Informatics(3)

——The Contribution of Social Psychology——

Yuji TANAKA

This paper is the third part of the series which is intended to construct the scientific concept of Informatics. This time, we described about it from the psychological point of view because the writer was a social psychologist.

First, we described on the humanistic comprehension and the means of "social" which we often use as the human nature concepts.

Second, we introduced the psychological process of interaction between person and person. The topics cited here were the stimulus-reaction theory in Behaviorism, New-behaviorism theory with the "mind" and the interaction theory between minds. The purpose of this section was focused on the system approach to interpersonal relationships, and further, human network or so call "holonic" which means interhelp.

Third, we discussed on the possibility of psychological contributions to Informatics from the points of solution of human affairs which would happen in Japanese society in near future.

### §1 心理学の課題

#### (1) 人間への理解

心理学の目的は基本的には人間について理解を深めることである。そしてここで「人間」とは心理学の場合厳密には「心」をさしている。すなわち心理学は一般には人の心を研究する学問といわれているが、より平凡に言うならそれは「人の『心』を知り学ぶ」ということになる。

心理学が発足して以来、心理学がどのような学問かについての論議は多くなされてきた。

かつては心理学は意識についての学問であるといわれたし、また今日では、心理学は行動科学であるといわれている。他方心理学はその研究対象の性質から哲学と混同されたり、またそのアプローチの仕方の多様性から、心理学の目的が曖昧になり、その本来の対象が見失われることもしばしばあった。

「意識」という問題にしても、意識とは何か、意識が研究対象であるなら意識しない行動は研究対象になりえないかという問題に入り込んでしまう。また Psyche=精神はもともと宗教が対象としたものであるところから哲

学や倫理学と混同されてもやむを得ない歴史的背景を持っている。

確かに今日ではこうした誤解は少なくなっているが、他方で、今日の心理学は外見においてネズミやチンパンジーその他種々の動物を研究手段に用いたり、数学的なモデルをつくりだして、盛んにコンピュータを駆使する研究者もいて、心理学者たちの研究活動そのものが、心理学を誤解させるものになっていることも多い。

しかしながら、冒頭で述べた通り、心理学が提起しているのは人の心に関する素朴な疑問である。人はだれでも自分に「心」があることを認めている。心で考え、心で判断し、心で行動を決定している。そして、「心」という語があり、その概念に共通性がありコミュニケーションが可能であるということは、他人にも「心」という語に対応するものがあることを意味する。したがって、人はみな他人にも自分にあると同じ「心」があるとして、そこに疑いを持たない。ところが、自分と同じ「心」を持っているはずの他人が、自分と同じ行動をしないことには疑問を持つのである。この疑問は時として果たして他人に「心」は本当にあるのだろうかという疑問にさえ発展する。

考えてみれば、自分にある「心」と同じような「心」が他人にもあると考えることさえが、そもそも仮定にすぎない。「相手の心の内を見て取る」などとの表現はあっても、だれも本当に「心」を直接目で見た者や、それにじかに手で触ったと言う者はいないのである。その意味で他人の「心」は、少なくとも物理的な存在ではなく人が互いに仮定しあっているものなのである。

実際、仮定の仕方では動物や植物に心を仮定することさえできるのである。動物や植物ばかりでない、古代人や幼児は太陽や月、山や河にさえ心を仮定したではないか。まして、われわれが同じ顔や体をもった同種の他人に

心を仮定するのは当然である。

それゆえ、心理学が提起する疑問は、その仮定された「心」が人によって異なった動きをするということに対する疑問であり、どのような理由によってそのような異なった動きが生ずるのかということこそが最大の関心事ということになる。

## (2)社会心理学の課題

今日、心理学は多様な分野に進出している。少なくとも人の心が何等かの影響を与えている場、すなわち人間が介入する場はすべて心理学が関与しうる場と言えるわけだが、そうした中で社会という場での人間の活動、特に心の働き方に注目するのが社会心理学である。

しかしながら、社会心理学も心理学であるからには「心」の働きを研究の対象とすることに変わりがない。ただここで社会という場合、人は複数であり、したがって「心」も複数の状態であることを意味している。だがこのことは、「心」が単に自分の心だけで存在するのではなく、他人の「心」の存在を前提にして、それとの比較において心が理解されるということの意味する。そして、このことを考えるならば、心理学はそもそもが社会心理学であるべき宿命を持っているとの主張が出てくることも理解される。

ところで、心が他人の心との比較において探求されるということは、その2つの心の間に「関係」が生ずる事を意味する。すなわち、人は自分の心を基準にして他人の心を推測し、また推測された心と自分の心との比較から自分の心を微妙に変化させる。そしてこれとまったく同様のプロセスが相手側にも生じている。ただ、その影響の効果は両者がまったく同じというわけにはいかない。このことのゆえに、その相互影響効果が双方にとって関心事となり、これが社会心理学の研究対象となるのである。

結局、このことは「人と人との関係」が互いにどのような影響を与えあうかを意味する。

すでにこれまで繰り返し述べられてきたように、人間は本来的に社会的存在である。一個の人間はただ一個のみの存在ではそもそも意味をなさない。人はヒトとして生まれるが、先人が作った文化を彼らの社会活動を通して学び、その影響のもとで人間となる。したがって、人間そのものがその中に「社会」を含んでいる存在である。

社会心理学はその意味で現実の人間と人々の活動の姿を、具体的にとらえるのにもっともふさわしい学問ということができる。

### (3) 集団と社会の概念

社会心理学でいう「社会」は「人同志の心と心の関係とその効果を意味する」と述べたが、この意味からすれば、いわゆる「人間関係」とか「集団」という語もこれと同じである。人と人との心理的な関係は「人間関係」の本質的な部分であるし、またそのネットワークが「集団」である。そして、これらはいずれも人同士の相互影響過程を含んでおり、社会心理学の研究対象範囲にあるものである。

しかしながら、すでに本試論の2で述べたごとく、もともと「社会」という語は「文化」を実体とする側面を強く持っている。たとえばわれわれが、単に「社会」という語を使うときには、その実体は人びとを拘束している秩序や制度、あるいは歴史的な習慣を指していることが多い。それらは具体的には法律や規則として、あるいは人びとの間で暗黙の内に認められている儀礼や作法として実在するし、さらには用具、機具、建物、農地などいわゆる「道具」として具現している。これらの中にはもちろん芸術作品となるものもあり、いうならば文化そのものが人類の作品といえる。そして、それらの目的は、すべて究極的には、人間がより幸福になろうとして作り出したものにちがいないということも、この際認識されなければならない。

「社会学」は、まさにそうした人間が作った文化とその文化から影響を受ける人間との間

の相互作用的な関係を研究する学問である。したがって、その中には文化を作り出す際の人びとの協力関係、すなわち組織や秩序の問題があるし、文化の諸影響という面についても、人間の側の心理学的な認知過程が含まれる。

それゆえ、社会学が心理学と深くかかわっているのは当然であるわけだが、心理学もまた「文化」と深くかかわっている。それは、「文化」が人びとの幸福追求の一つの結果であり、幸福追求そのものは、人びとの「欲求」と「感情」に根ざしているからである。しかしながら、これらはしばしば個人的な概念に理解され、集団的状况においてはこれが排除の対象になるのである。しかし、今日ある文化を考えると、それらはすべてとわいていい程集団的な活動による成果である。もちろん、その過程においては、個人にとって欲求や感情が無視されたり阻害されたりしたこともあり、個と全体との間の相克の苦しみは、今後とも引き続くことであろう。だが、人びとの最大多数的な幸福追求の結果が現代の文明をもたらしたのであれば、われわれは再び人びとの集団的知性によって最大多数の幸福の実現のために努力を結集しなければならない。その際、この「欲求」や「感情」をどう処理していくかはきわめて重要な問題である。なぜなら、それらは多分に個人的とは言え、人はそれによって動かされ、行動するのであり、あらゆる創造活動の原動力だからである。

ここにあらためて「集団」概念の重要性が浮かび上がってくる。「人びとの相互影響過程のネットワーク」としての集団は、個人的幸福と全体的幸福の最も基本的な接点であるとともに、全体幸福の実現のために必要な協力組織の出発点でもあるからである。

### (4) 組織と集団

「組織」と「集団」は混同されて使われることが多い概念である。「組織集団」とか「集団

組織」もそうであるが、「組織心理学」や「集団心理学」という語もその中身になると明確な区別がない。

「組織集団」は、言葉通りに解釈すれば「組織化された集団」という意味であろうし、それは「組織」そのものを指す。また、「集団組織」も「集団的組織」あるいは「集団が組織化されたもの」との意味であろうが、いずれも組織と集団を区別できないまま複合的に重ねて使ったというのが実状と想像される。

「組織心理学」と「集団心理学」では若干の差異があるようである。「組織心理学」はどちらかといえば経営学に関心を寄せている学者や研究者が好んで使う傾向があるが、実際、書物の出版に際してはこの名称の方が企業に携わる経営者やマネージャーの関心をそそるようである。その点「集団心理学」という名称はまさに心理学の一分野を示しており、ある種のアカデミズムを感じさせるが、経営学的な関心からははなはだ抽象的な感じを与える。

他方集団の概念においても、「フォーマル・グループ」と「インフォーマル・グループ」があるが、「フォーマル・グループ」は明らかに「組織」を指し、「インフォーマル・グループ」こそが実質的な「集団」を意味する。

そもそも「組織心理学」といっても、それは組織という人びとのフォーマルな集まりの中に発生するインフォーマルな人間同士の関係が中心課題であり、そこでは産業心理学の中の人間関係論や集団心理学、特にグループ・ダイナミクス（集団力学）がその中心を占めている。（山田雄一 1971, Schein, E. H. 1980）

南博（1958）は「集団とは、(1)一定の場所、あるいは地域（行動空間）に人びとが集まっていて、(2)その集まりは、一定の期間（行動時間）、(3)ある共通の目標（行動目標）に向かい、(4)その目標をめざす行動を一つの組織（組織関係）に編成し、成員のあいだに役割とそ

れに応じた地位をきめ、(5)その成員のあいだに仕事の上で、あるいは仕事以外の私的な交渉で、たがいに欲求、思想、感情を交換するシステム（コミュニケーション関係）をもち、(6)そこで成員のあいだには愛憎、親疎などの心理関係が生まれる。」と述べているが、「これらの6つの中で、組織関係、コミュニケーション関係、心理関係の3つをひとまとめにして、人間関係とよぶ」としている。

ところで、ここでいう人間関係を構成する3つの要素のうち、組織関係、コミュニケーション関係には、公式的なものと非公式的なものがあるが、心理関係においては公式的なものはない。心理関係はいわゆる感情や欲求に発するものであり、もともと非公式なものである。それゆえこうした非公式なものを排除した場合、「組織では私情を捨てて」というごとく、集団はまさに「組織」になってしまう。逆にまた、心理関係を取り込むということは感情を受容することを意味する。

ここに「組織」と「集団」が基本的に区別される根拠がある。すなわち組織には感情や欲求はなく、集団にはそれがあるということである。したがって、集団は心理学の研究対象に成りうるが、他方でそれがなく組織は心理学の対象には成りえず、その意味で「組織心理学」という語は成立しえなくなるわけである。

## §2 人間間の相互影響過程

### (1)心理学と刺激—反応説

すでに述べたように、心理学は仮定された構成概念である「心」について、かつて、長い間思索を巡らしていたことがあった。しかし、これに疑問を差しはさみ、このあいまいな概念の使用をやめさせることを提唱したのが、ワトソン（Watson, J. B.）をはじめとする行動主義の心理学者たちであった。彼らは、心という概念を仮定しないことによって、人の行動も他の動物の行動と同じように研究で

きるとして、動物行動を積極的に研究した。そしていわゆる刺激—反応の理論を提唱した。これは、いわゆる科学における原因—結果論と同様の考え方を心理学にも導入することによって、心理学をより科学的なものにしようとするものであり、心理学の科学化に大変貢献した。

しかし、これは、心理学が本来探求の対象としてきた「心」を自ら放棄したことにもなった。そして新たに「行動科学」という語も出てきたわけであるが、「心」そのものが人間の研究の対象から無くなってしまふことはありえない。それゆえ行動科学のこうした行き過ぎを是正し、「心」の概念を許容して、むしろこの概念の実在性を探求することを目的とした心理学こそを、確立しようとする努力がなされることとなったのである。この立場はかつての行動主義に対して新行動主義とよばれ、本当の意味での「科学としての心理学」がここに成立したともいえる。

現在、心理学は刺激→反応という図式の中に図1に示すようなブラック・ボックスとして「心」を挿入し、この実体に迫ろうとしている。

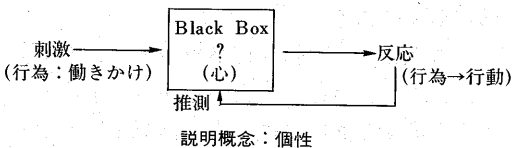


図1 ブラック・ボックスとしての「心」

すでに、同一刺激に対して多様な反応が発生するメカニズムについては「個性」が説明概念として用いられている。そして、その一部はパーソナリティーや知能として測定が可能になってきており、その実在性が確認されている。

## (2) 心理的相互作用説

しかしながら、「心」の実在性が保証された後には、そうした実在としての「心」がどう誕生し、形成されてきたかということが問題

となる。これは、科学が目指す法則性や予言性という点から重要な課題であり、心理学では行動の予測や育成、教育の問題としてその解明が期待されているものである。

そこで、先の刺激→反応の図式を人間の現実の生活にあてはめてみる必要が出てくる。そしてまず気付くことは、ここでいう刺激とは、人が他人内部に仮定した「心」に向ける対人的行為であるという点である。このことから、そこに発生する「反応」が単に反応というだけのものではなく、それもまた「行為」であることにも気付く。

すなわち人間間では、刺激は行為のことであり、反応もまた行為を意味する。したがって、外見的には両者は行為—知覚—行為—知覚……とたがいに働きかけを継続していくのである。さらにいえば、相手の行為は直前の自分の行為についてのフィードバックであるから、それによって、つぎの自分の行為は制御される。しかも、このシステムは同時に相手にとっても存在するから、対人関係のシステムは、二つのサブシステムが相互作用するシステムということになるのである。

では、いったい人はなぜ他者に向かって行為するのであろうか。心理学的には、人の行動はすべて欲求と動因との関係で説明される。すなわち、行動の主体に欲求があり、ある対象が動因となって行動が発生するのである。したがって、行動の背後には欲求があるということになるわけだが、対人関係ではこれを行為に秘められた「期待」と言い換えることができる。

「行為」は、もちろん単なる刺激エネルギーの発生ではない。人間の行為はすべてサイン(記号)である。それには意味があり、そこに何らかの期待がこめられている。それゆえ、知覚もまた単にエネルギーの受容にとどまるわけにはいかない。そして心理学的には、期待の機能とそれをキャッチする相手の機能に関心を持たざるを得ない。この期待をキャッ

チする機能を、筆者は「共感」と名付けている。この期待—共感の関係は、行為—知覚の相互依存性とまったく同様、やはりここでも互いに依存的であることはいままでの間もない。しかし、行為者を中心というならば、それはむしろ相手に影響を与えようとする積極的行為と意味づけることが必要である。

これらの関係を図示したものが図2である。対人関係における心理的相互作用はこのような螺旋形の開放システムといえることができる。

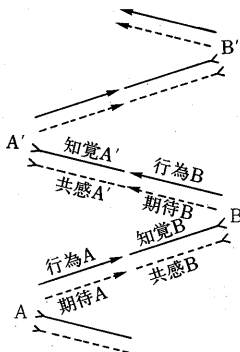


図2 対人関係における相互作用

### (3)心理学におけるシステム論

アメリカの生理学者キャノン (Cannon, W. B. 1871~1945) がかつて唱えたホメオスターシスの理論は、生理学的レベルで、生活体としての人の内的活動をシステムとしてとらえた最初のものといえる。しかしこの場合、いわゆる今日的な意味でシステムとしてとらえられたわけではない。すなわち、ここでホメオスターシスとは生活体が環境への適応や生命の維持のために必要な平衡状態を保つ機能をいうのであるが、そのための調節機能を人が内的に持っていることについては、すでにプリューゲル (Pflüger, 1877) その他が指摘していたことでもあった。にもかかわらず、キャノンの功績が大なのは、次第に明らかになった身体内部の多くの器官が、互いに補い合い相互に作用し合って、しかも統一的に調和された全機能的活動を営む結果、実現される

動的な平衡状態を物理的な平衡状態と区別した点にある。

こうした考え方は、ウィナー (Wiener, N. 1947) が生体の自動調節機序を人工の自動制御機械と比較して提唱したサイバネティックスの考え方に通じるものである。

サイバネティックス (Cybernetics) は一言でいえば「自動制御」機構に関する理論で、そのメカニズムは動物の環境への外見的な適応行動に見ることがができる。すなわち、われわれが机の上のコップを手にとるという動作にしても、視覚的に入ってくる手とコップとの距離の情報を得て、それをより縮めるように腕の筋肉を調節することによって手をコップに近づけることができるのである。

ここで、視覚的に入ってくる情報は筋肉へ加えた力のフィードバックであり、その情報が引き続く筋肉への力の加え方を制御することに貢献するのである。こうした変化と調節の循環回路はフィードバック・ループ (feedback loop) あるいはサーボ・ループ (servoloop) と呼ばれるが、こうした機構は人の行動のいたるところで機能しており、それらの全体がさらに互いに関連しあっていることは明らかである。

システムとは、結局は構成する諸要素が相互に依存しあい作用しあいながら、全体の目的を達成する方向に働く集合体であり、サイバネティックスは、要素相互間の情報と作用の回路のメカニズムを指すものである。そして、心理学は、人間を研究対象とする限り、こうしたシステムの実体を追究しつづけることになるのである。

### (4)ネットワークとしての社会関係

心理学が扱う対象は、システムとして働いている「心」である。「心」はヒトの内側にあり、そのヒトの生理的なシステムに支配されていると考えられる。そしてまた他方で、ヒトは人間として、他のヒトのシステムと相互作用する。この相互作用もまた一つのシステ

ムである。少なくとも、互いが共によりよく共存しようとするとき、彼らは互いにシステムの要素として機能しあわなくてはならないし、実際人びとの多くはそのようにして自らの行動をコントロールしてきたのである。

ところで、一般に、システムには上位のシステムと下位のシステムが存在し、同じレベルのいくつかのシステムは、同時にそれらを包含する上位の一つのシステムの中で機能している。しかし、ここで、上位、下位とは決して価値的階層を示すものではない。ここでいう上位システムは、いくつかの下位システム（サブシステム）が機能してはじめて機能するシステムのことである。それゆえ、むしろ従属的なシステムともいえるのである。

実際、人びとの社会的関係（人間関係）においては、その社会が目ざす目標にもとづいて、そこに所属する複数の人びとが互いに作用しあって一つのシステムとして機能することが多い。人びとはそれぞれ一つのシステムであると同時に、心理的相互作用システムの構成要素でもある。

結局、人は、ヒトとしてのシステムと社会としてのシステムの間において機能している存在であり、ここでいう「人」がすなわち「心」でもある。そして、こうしたシステムの全体の中で「心」そのものが形成されることもまた理解される。

心理学が対象とする「心」は、こうして人間社会の一部として存在し、つねに社会全体のシステムの一部として働いている。それは具体的には、人間関係と集団のシステムの中で明らかになるわけであるが、同時にまた、それらは原因→結果、あるいは刺激→反応という系ではなく、複数の原因→多様な影響＝複数の原因→多様な影響という系、あるいは、行為→応答＝行為→応答という系でもある。

心理学がシステムという観点から人間を見るとき、もはやその全体は系列的に機能しているのではなく、ネットワークあるいはホロ

ンとして互いに平等かつ援助的に機能しているといえるのである。

### §3 情報学への心理学の貢献

#### (1)人間探求の時代

現代ほど「人間」が「個」として追究された時代がかつてあったであろうか。そう考えるのは、あながち筆者ばかりではあるまい。あのルネッサンス時代が「人間復興」の時代であったとすれば、現代は「人間探求」の時代ということができよう。

この傾向は、組織化が高度に進んで社会の仕組みが複雑化する中で、ますます強まっている。たとえば組織化は人間疎外を引き起こし、組織自体の機能をマヒさせかねないが、これを活性化させるためには、組織の要素たる現実の人間の活性化以外には方法がない。いかに組織を綿密なものにしても、それが現実の一人ひとりの実態にそぐわないものであれば、組織そのものは動かないのである。それゆえ、人間の実態にあった組織というものがどうしても必要になるのであって、ここにますます人間に関する探求は重要性を増すのである。

他方、現代は人びとが一人ひとり尊重され、個の欲求実現と幸福追求の自由が保障された時代である。すべての経済活動はその上に成り立っているし、そうした自由な経済活動なしには、もはや進歩も繁栄も考えられなくなっている。そして今、物質的な面での生産技術は、人びとが考えられる限りのところにまで達し、人びとはもはや、「物」に飽き、「物」以上の何かを求めている。実際、「物」を売ることに慣れたこの資本主義経済の中で、サービスを商品とした企業が急速に伸びかつ広がっていることが、そのことを端的に物語っている。

そして、そこでは、客が何を欲しがっているかより、何を「期待」しているかが、関心の対象とされ、マーケティングもそこに焦

点があてられている。ここでも、また、人間は追求の重要な対象となっている。

さらにまた、企業の管理者たちをはじめ、一般社会のリーダーたちは、人びとの能力を引き出し、それをいかに活用するかに最大の関心を払っている。それなくしては企業は、もはや生き残れないという切迫感が経営者たちにあるからであるが、このことは、地域社会の自治運営にもあてはまる。そして、そうした組織活動に適応し、自分自身の自己実現をはかっていくため、人びとは自らも人間探求への意欲を高めている。組織が人びとに課する役割と責任、そこから来るストレス、それを解決するための各種セルフコントロールの技術、その上に構築されなければならない現代処世術。そして、人生八十年時代にそなえて個人が持たなければならない人生計画。これらは、「物」をはるかに越えた質的世界の問題であると同時に、多くの人びとに共通した課題として、人びとの前途に立ちはだかっている。

## (2)組織と人間関係の改善

人間の本質はその社会性にあり、社会性とは、具体的には、人と人とのかかわりを指す。

実際、人間社会においては、すべての営みがこの対人的関係を出発点にしている。

人は生まれるときには一人で生まれてくるが、その瞬間からもう一人ではなくなる。いや、最近の研究では、子どもは母親の胎内にいるときから母親という「人間」と対人関係を営んでいるという。

人がより人間らしい人間になるためには、人間らしい人間との交流が必要であり、それゆえに人間形成に対人関係は欠かせない。子どもが生まれてすぐ経験する母子の関係はもちろん、父と子の関係、きょうだい関係、親族や近隣における対人関係、友人・仲間関係、教師-生徒関係さらには成長後の夫婦関係や嫁姑関係あるいは職場や地域社会の対人関係まで、これらのすべての対人関係が人間形成

にかかわってくるのである。

しかし他方で、それらすべてが、今日、大なり小なり、人びとの個人的欲求実現の障害要因として問題意識化されている。親の子離れ、子の親離れの問題、結婚難の問題も、子の数が少なくなったことから生ずる親子間の利害が絡んでいたり、離婚問題や子どもたちの非行問題もそれぞれが描く人生への想いや互いへの期待のずれが根底にあるといえる。また、職場に関係したストレスやノイローゼ、精神障害の問題も組織に規定される行動と自己の意志との間の葛藤が原因の一端をなしているのかもしれない。

もちろん、こうした問題がこれまでの社会にもなかったわけではない。むしろ、社会が持ついろいろな矛盾や問題は、最終的にはすべて人びとの対人関係の中に圧縮され、個人的な課題として処理されてきたといえる。

物質的生産が社会の第一課題であった時代はもちろんのこと、組織の維持、活性化が最大の関心事となっている現代においても、個人の悩みは当然のごとく無視されやすい。しかし、個人的課題を無視することが組織維持を危うくするというジレンマの状況が、組織と個人との関係の中で起こっているのである。

組織というフォーマルな世界に対して、個人というインフォーマルな世界をどう関係づけるかという点に関して、これまで「人間関係」という用語は大きく貢献してきたといえる。多くの人間関係論は、組織に対して、人間が持つインフォーマルな欲求を認めるべく説いてきたし、それなりに個と全体に関する見解を提供してきた。

しかし、産業心理学に端を発した人間関係論は、個人にシワ寄せされた悩みを人間の生き方の中で解決していかなければならないという現代的状況に対しては限界を持っている。その点、ロジャースら、心理療法家たちによって実践されてきたカウンセリングや、その他の対人関係問題の治療経験を基礎とした新



しい人間関係論は、個人課題の解決を支援するうえで有効である。

カウンセリングはまた、「対話による自己発見という、人間に基本的な営み」といわれるように(水島恵一 1978)、対人関係の典型的な一つの姿を持っている。それは、人間の営みの基本的単位である二者関係の上に立ってはいるが、いわゆるコミュニケーションを通じた相互影響過程の典型的な姿である。それゆえ、こうした対人関係的パターンを基礎とした人間関係論は、自らネットワークあるいはホロンの意味あいの強いものとなるのである。

### (3)新しい「教育」概念の形成

「教育」という語は、これまで必ずといって良い程「学校」という言葉と結び付いてきた。もちろん、「学校教育」という言葉がある以上、「学校」と「教育」は切り離して考えられて当然であったはずだが、そうではなかった。

実際、人びとは、学校は教育の場であり、「教育を受ける」ために「学校」へ行ったのである。しかし、今日、学校はもはや人間にとって必要な教育のほんの一部しか果たさなくなってきた。進学率が高まり、ほぼ95%が高等学校へ進む現状においては必然的に多様な生徒が集団を組むことになるわけだが、学校はその多様性を受け入れられなくなっているのである。

他方、学校は画一化の最たるものであるとの見方もされる。生徒たちの多様性に対応するどころか、それを無理矢理に画一化しようとするかつてのマスプロ工場の生産手法が依然としてはびこっている。これらをどう現代化していくかは今日学校が急務とすべきはずのことである。

「教育」がそもそも「学校」というところと結び付いたのは近代に入ってからで、それはまさに工業化社会の発展とともに定着したといえる。しかし、「教育」がそれ以前から人間の社会に存在していたことは確かである。そ

れゆえ「教育」の原点をそこに求めてみることは重要である。

そこでまず第一にいえることは、教育は必ずしも若い者たちのみが対象ではなかったということである。もちろん、若者たちが早く大人に成るべく、集中的に先人の知識や技能を受け継いだのであるが、大人たちもまた、その上のものたちから指導を受けたのである。すなわち、「生涯教育」の考え方は、学校教育以前にこそみられたわけで、社会が工業化の時代になり都市生活や核家族生活が進むにつれて、むしろ、そうした考え方が無くなったといえる。

今日の生涯教育はまず企業教育として始まったといえるが、それはやがて自主的学習の色彩を強めて、社会教育の一つとなりつつある。

知識の専門的分化がすすんだ今日では、もはや、教える者と教えられる者との年令的序列が消失している。むしろ互いがまさにホロンのように援助しあいながら、その期待に応えようとしているのである。

第二に「教育」は教えること、育てることを意味しているが、それは「知っている者が知らない者に教える」ということによって知識や技術を後世に残そうとする行為である。それはコミュニケーション技術に支えられてはじめて可能になる。

それゆえ、教育はコミュニケーションそのものと見ることができる。コミュニケーションは、今日マスコミをはじめ、広告、宣伝、あるいは説得という意味あいが強い。考えて見れば、それらはすべて人に知らしめることをやっているわけで、しばしば使われる「教育、宣伝」という語を持ち出すまでもなく、一つの教育活動とみることができるわけである。

第三に、「教育」は個人の幸福に貢献するものでなければならないということである。工業化社会における教育はしばしば個人を組織

の一部として埋没させ、無名化してきた。その典型は戦争に見ることができるが、工業化社会の目的が資本を中心とした利益の奪い合いであり、個人の幸福が最大限に制約されたことにその原因があったといえる。

しかし、「教育」は人類が自らを繁栄させるための自然の営みであり、人間の無名化=非人間化は明らかにそれと矛盾する。

今日、人びとは自らの自己実現欲求を充足すべく、教育への期待を大きくしている。それは、自らのための学習であり、そのための助け合いの場なのである。

#### 参 考 文 献

二村敏子他編 1982 現代経営学(5) 組織の中の人  
間行動—組織行動論のすすめ—有斐閣

- 平島廉久 1985 ホロンの高感度経営の実践 日  
本能率協会
- 松田正一編 1983 システムと行動 泉文堂
- 水島恵一他 1978 カウンセリングを学ぶ 有斐閣
- 南 博 1958 社会心理学 岩波新書
- 山田雄一 1971 組織心理学 有斐閣
- Buckley, W. 1967 Sociology and Modern System  
Theory, Prentice Hall, Inc. (新睦人他訳「一般社  
会システム論」誠信書房 1980)
- Schein, E. H. 1980 Organizational Psychology (3  
rd edition), Prentice Hall, Inc. (松井貴夫訳「組  
織心理学」岩波書店1981)
- Taylor, H. F. 1970, Balance in Small Groups,  
Litton Educational Publishing Inc. (三隅二不  
二「集団システム論」誠信書房 1978)